

1 男女平等に関する意識について

● 男女の地位の平等感

男女の地位が「平等になっている」については、【家庭生活で】、【学校教育の場で】では3割台半ばで比較的平等感が強い。一方で【社会通念や風潮（習慣・しきたり）などで】、【社会全体の中で】、【政治の場で】では不平等感が強い。8つの分野すべてにおいて「平等になっている」は、男性が女性を上回り、「平等になっていない」は【学校教育の場で】、【職場で】を除き女性が男性を上回っている。

● 性別役割分担意識と同感する理由、同感しない理由

「男性は仕事、女性は家庭」という考え方については、「同感しない」が5割強となっており、「同感する」は2割に満たない。「同感しない」は女性では5割台半ば、男性では5割弱である。

同感する理由としては、「子どもの成長にとって良いと思うから」が男女ともに最も高く、「性別で役割分担をした方が効率が良いと思うから」は男性が女性を上回り、「個人的にそうありたいと思うから」は女性が男性を上回っている。

同感しない理由としては、「男女ともに仕事と家庭に関わる方が、各個人、家庭にとって良いと思うから」が男女ともに4割台と最も高い。

● メディアでの性に関する表現について

メディアでの性に関する表現については、「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れないような配慮が足りない」が4割台半ばである。性別で見ると、全体的に女性が男性より問題としている割合が高い。平成24年調査と比較すると、メディアでの性に関する表現を問題視する選択肢について全体的に減少傾向である。女性の減少幅が男性よりも大きく「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れないような配慮が足りない」は6.6ポイント減少している。

2 家庭生活・子育てについて

● 家庭生活での役割分担の現実と希望

家庭における8つの分野についての役割分担の現実には、【家事（炊事・洗濯・掃除など）】、【子育て（子どもの世話、しつけ、教育など）】、【介護（介護の必要な親の世話、病人の介護など）】、【地域の行事への参加】、【自治会、PTA活動】、【家計の管理】では「主として女性が行っている」が最も高くなっている。【高額な商品や土地、家屋の購入の決定】は「共同して分担している」が最も高く、【生活費の確保】は「主として男性が行っている」が5割台半ばと最も高い。

希望では、すべての分野において「共同して分担すべき」が最も高いが、【生活費の確保】、【高額な商品や土地、家屋の購入の決定】は男性、【家事（炊事・洗濯・掃除など）】や【家計の管理】は女性の役割とする意識が強い。性別で見ると、「共同して分担すべき」はすべての分野で女性が男性を上回っている。

● 家庭生活の優先度

【現実】では男女ともに「仕事や自分の活動と家庭生活を同時に重視」が最も高く、次に女性は家庭生活を優先、男性は仕事や自分の活動を優先している。一方、【希望】では、男女ともに「仕

事や自分の活動と家庭生活を同時に重視」が5割台半ばとなっており、仕事や自分の活動と家庭生活の両立を希望している。

● 子育てへのかかわり

子育て経験のある人に子育てへのかかわり方について聞いたところ、《十分である（合計）》（「十分である」と「ある程度は十分である」の合計）が【本人】では7割台半ば、【配偶者・パートナー】では6割台半ばとなっているが、女性は【配偶者・パートナー】について《十分でない（合計）》が4割台半ばとなっている。

子育てへのかかわりが十分でない理由としては、【本人】、【配偶者・パートナー】ともに「仕事が忙しすぎるため」が最も高くなっている。【本人】では男性は6割台半ば、女性は5割台半ばが「仕事が忙しすぎるため」としている。一方、【配偶者・パートナー】では、「仕事が忙しすぎるため」が女性では4割強、男性では2割台半ばとなっている。

3 男女の就業・仕事について

● 女性の働き方の理想と現実

女性の働き方について【理想】は女性では「パートタイム再就職型」が最も高く、次いで「フルタイム再就職型」、「就業継続型」、「出産退職型」となっており、《再チャレンジ型》を望む人が多くなっている。男性では「フルタイム再就職型」が最も高く、女性と同様に《再チャレンジ型》を望む人が多いが、「出産退職型」が2割弱となっており、《専業主婦型》を望む人の割合が女性よりも高い。

【現実】の働き方は、「パートタイム再就職型」が最も高く、次いで女性では「就業継続型」、男性では「出産退職型」、「結婚退職型」となっている。

● 勤務先の女性の労働状況

勤務先の女性の労働状況は「賃金に男女差がある」が約3割で最も高く、次いで「昇進、昇給に男女差がある」が3割弱、「男性に比べて女性の採用が少ない」と「配置場所が限られている」が2割台半ばとなっている。性別で見ると、「男性に比べて女性の採用が少ない」と「配置場所が限られている」は男性が女性を上回っている。一方、「結婚や出産で退職しなければならないような雰囲気がある」、「有給休暇や育児・介護休暇が取得しにくい」では女性が男性を上回っている。

● 男性が育児・介護休業を取得することについての考え

育児休業については《取得した方がよい（合計）》（「積極的に取得した方がよい」と「どちらかといえば取得した方がよい」の合計）が7割台半ばとなっている。また、介護休業についても《取得した方がよい（合計）》が約8割と高くなっている。性別で見ると、どちらも「積極的に取得した方がよい」では女性が男性を上回っており、女性の取得への強い意向がうかがえる。

● 女性が結婚後、出産後も働き続けるためや退職後に再就職するために重要なこと

女性が結婚後、出産後も働き続けるためには「パートナー（男性）の理解や家事・育児などへの参加」、「企業経営者や職場の理解」、「保育施設や学童保育の充実」、「育児・介護休業などの休暇制度の充実」が重要であると考えている。また、女性が結婚や出産のために退職し、その後再

就職するためには「家族の理解や家事・育児などへの参加」、「子どもや介護を必要とする人などを預かってくれる施設の充実」、「企業経営者や職場の理解」、「企業等が再就職を希望する人を雇用する制度の充実」を重要と考えている。

● 仕事と家庭の両立に必要なこと

仕事と家庭の両立をしていくための条件としては、「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」、「代替要員の確保など、育児休業・介護休業制度を利用できる職場環境をつくること」が4割弱で高く、「地域の保育施設や保育時間の延長など保育内容を充実すること」が3割台半ばとなっている。性別で見ると、「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」は女性が男性を上回っている。一方、「年間労働時間を短縮すること」は男性が女性を上回っている。

4 男女の社会参画について

● 地方自治体などの施策への女性の意見・考え方の反映度と反映されていない理由

《反映されている（合計）》（「十分反映されている」と「ある程度反映されている」の合計）は3割台半ばとなっているが、《反映されていない（合計）》（「あまり反映されていない」と「ほとんど反映されていない」の合計）も3割台半ばとなっている。性別で見ると、《反映されている（合計）》は男性が女性を上回り、《反映されていない（合計）》は女性が男性を上回っている。

女性の意見・考え方が反映されていない理由としては、「社会のしくみが女性に不利」、「男性の意識、理解が足りない」が約4割となっている。性別で見ると、「男性の意識、理解が足りない」は女性が男性を上回っており、「自治会長や組合団体、地域組織リーダーに女性が少ない」は男性が女性を上回っている。

● 特に女性の参画が進むべき分野とポジティブアクションに対する考え方

今後特に女性の参画が進むべき分野としては、「国会・県議会・市町村議会等の議員」が約6割と最も高く、「企業の管理職、労働組合の幹部」、「国の省庁、県庁、市町村の役所等」が4割台半ばとなっている。性別で見ると、「国の省庁、県庁、市町村の役所等」で女性が男性を上回るなど、上位5項目については女性が男性を上回っている。一方、男性が女性を上回っているものとしては「建設業などの女性の少ない職場」、「理工系などの女性の少ない分野の学生」、「自治会、PTAなどの役員」がある。

ポジティブアクションに対する考え方を聞いたところ、《賛成する（合計）》（「賛成する」と「どちらかといえば賛成する」の合計）は5割台半ばとなっている。《反対する（合計）》（「どちらかといえば反対する」と「反対する」の合計）は1割強となっている。性別で見ると、《賛成する（合計）》は女性が5割台半ば、男性が5割強となっているが、《反対する（合計）》は男性が女性を上回っている。

● 社会活動参加の経験と今後の希望

【これまでに行ったことのある活動】は、「町内会や自治会などの地域活動」が3割台半ばとなっており、次いで「自然・環境保護に関する活動（環境美化・清掃活動、リサイクル活動、牛乳

パックの回収など)」、「自分の職業を通じて」、「保育園・幼稚園・学校などのPTA活動」となっている。性別で見ると、女性では主に「保育園・幼稚園・学校などのPTA活動」、「自然・環境保護に関する活動(環境美化・清掃活動、リサイクル活動、牛乳パックの回収など)」、「家事や子どもの養育を通じて」、「交通安全に関する活動(子どもの登下校時の安全監視など)」で男性を上回っている。男性では主に「自主防災活動や災害援助活動」、「体育、スポーツ・文化に関する活動(スポーツ・レクリエーション指導、祭り、学校でのクラブ活動における指導など)」で女性を上回っている。

【今後行いたい活動】は、「社会福祉に関する活動」が3割弱で最も高く、次いで「公共施設での活動」、「自然・環境保護に関する活動(環境美化・清掃活動、リサイクル活動、牛乳パックの回収など)」、「自主防災活動や災害援助活動」となっている。性別で見ると、女性では主に「社会福祉に関する活動」、「保健・医療・衛生に関する活動(病院ボランティアなど)」、「家事や子どもの養育を通じて」、「自然・環境保護に関する活動(環境美化・清掃活動、リサイクル活動、牛乳パックの回収など)」で男性を上回っている。男性では主に「自主防災活動や災害援助活動」、「自分の職業を通じて」、「交通安全に関する活動(子どもの登下校時の安全監視など)」で女性を上回っている。

5 女性に対する暴力について

● 夫婦(事実婚や別居中を含む)間の暴力と認識される行為

夫婦間で行われた場合に「どんな場合でも暴力にあたる」と考える人が多い項目は、【刃物などを突きつけて、おどす】、【身体を傷つける可能性のある物でなぐる、突き飛ばしたり壁にたたきつけたりする】、【骨折させる】、【平手でぶつ、足でける】で8割以上が“暴力にあたる”と認識している。これに対し、【何を言っても、長期間無視し続ける】、【交友関係、電話、メール、郵便物を細かく監視する】、【見たくないのに、ポルノビデオやポルノ雑誌を見せる】では“暴力にあたる”という認識が低い。【大声でどなる、『役立たず』とか、『能なし』などと言う】では男女間での認識の差が大きくなっている。

● 配偶者等への加害経験の有無と加害行為に至ったきっかけ

配偶者・パートナーがいる(いた)人について加害経験を聞いたところ、《経験がある(合計)》(「何度もあった」と「1、2度あった」の合計)は、【何を言っても、長期間無視し続ける】、【大声でどなる、『役立たず』とか、『能なし』などと言う】、【平手でぶつ、足でける】、【物を投げつける、ドアをけったり壁に物を投げて、おどす】で1割を超える。性別で見ると、《経験がある(合計)》で女性と男性の差が大きいのは【大声でどなる、『役立たず』とか、『能なし』などと言う】、【なぐるふりをして、おどす】、【いやがるのに性的な行為を強要する】、【物を投げつける、ドアをけったり壁に物を投げて、おどす】でそれぞれ男性が女性を上回っている。

加害行為に至ったきっかけは、「いらいらがつのり、ある出来事がきっかけで感情が爆発した」が約5割となっている。「相手が自分の言うことを聞こうとしないので、行動でわからせようとした」は男性が女性を上回っており、「相手が自分に危害を加えてきたので、身を守ろうと思った」は女性が男性を上回っている。

● 配偶者等からの被害経験の有無と被害経験の時期、命の危険を感じた経験、暴力を受けた時の対処（心情）、ケガや医師の治療の有無

配偶者等からの被害経験について、「まったくない」という人が多数を占めているが、《経験がある（合計）》（「何度もあった」と「1、2度あった」の合計）は、【身体的暴力】で1割台半ばとなっている。性別で見ると、《経験がある（合計）》は【身体的暴力】、【精神的暴力】、【性的暴力】、【経済的暴力】のすべての暴力において女性が男性を上回っている。

配偶者等からの被害経験の時期は、「この1年に」は【精神的暴力】が1割台半ばと最も高く、次いで【身体的暴力】、【性的暴力】、【経済的暴力】となっている。「この2～5年に」は【精神的暴力】が2割台半ばで最も高くなっている。

被害経験者のうち、命の危険を「感じたことがある」は1割台半ばとなっている。性別で見ると、「感じたことがある」は女性では約2割となっているが、男性では約5%と少ない。

暴力を受けた時の対処（心情）としては、「別れたい（別れよう）と思ったが、別れなかった」が4割台半ばで最も高くなっている。性別で見ると、女性は「別れたい（別れよう）と思ったが、別れなかった」が約5割で最も高く、男性は「別れたい（別れよう）とは思わなかった」が約6割で最も高くなっている。

相手の行為によってケガをした人は約2割となっている。女性でケガをした人は2割強となっており、そのうち、「ケガをして医師の治療を受けた」、「ケガをして医師の治療が必要となる程度であったが、治療は受けなかった」人は約1割となっている。

● 配偶者等からの被害に対する子供の目撃、子供への行為の有無

親の被害を子供が目撃していたかを聞いたところ、「目撃していた」のは約2割となっており、「目撃していない」は4割強となっている。性別で見ると、「目撃していた」は女性（母親）が男性（父親）を上回っている。

子供への行為の内容は、「大声でどなる、無視する、人格を否定することばを言うなど心理的な虐待となる行為」が2割台半ばとなっており、「まったくない」は約5割となっている。

● 暴力に関する相談の有無と相談した相手、相談できなかった理由

相手から受けた行為について「相談できなかった」、「相談しようとは思わなかった」人は6割台半ばとなっており、「相談した」人は約3割となっている。性別で見ると、女性では4割弱が相談しているが、男性では1割に満たない。

相談した相手は、「友人・知人」や「家族・親せき」など身近な人の割合が高くなっている。

相談できなかった・相談しようとは思わなかった人の理由は、「相談するほどのことではないと思ったから」が5割台半ばとなっている。性別で見ると、「相談するほどのことではないと思ったから」は男性が女性を上回っている。一方、「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」、「相談しても無駄だと思ったから」は女性が男性を上回っている。

● 特定の異性から受けた被害経験の有無と命の危険の有無

特定の異性から受けた被害経験の有無は、《経験がある（合計）》は1割弱となっている。性別で見ると、《経験がある（合計）》は女性が男性を上回っている。

命の危険の有無は、命の危険を「感じたことがある」人が3割弱となっている。

● 10代、20代における交際相手の有無と被害経験、相談した相手

10代、20代のときに交際相手（配偶者以外）がいたかどうかについては、「交際相手がいた（いる）」は5割強となっている。性別でみると、「交際相手がいた（いる）」は女性が男性を上回っている。

10代、20代のときに交際相手からの暴力の被害を受けたかどうかでは、「10代にあった」、「20代にあった」、「両方あった」を合わせた《経験がある（合計）》は、【経済的暴力】では15人に1人の割合となっている。性別でみると、《経験がある（合計）》は、【身体的暴力】、【精神的暴力】、【性的暴力】、【経済的暴力】でそれぞれ女性が男性を上回っている。

受けた行為について相談した相手は、「友人・知人」や「家族・親せき」といった身近な人の割合が高いが、「誰（どこ）にも相談しなかった」人も4割強となっている。

● 不愉快な経験の有無

不愉快な経験の有無を聞いたところ、【職場】では『女（男）のくせに』『女（男）だから』と差別的な言い方をされた」、「宴会でお酒やデュエットを強要された」、「異性に身体をさわられた」が高くなっている。【職場】では、すべての項目で女性が男性を上回っている。【学校】では「容姿について傷つくようなことを言われた」、「『女（男）のくせに』『女（男）だから』と差別的な言い方をされた」が高く、ほとんどの項目で男性が女性を上回っている。【地域】では『女（男）のくせに』『女（男）だから』と差別的な言い方をされた」、「異性に身体をさわられた」、「帰宅途中などに後をつけられたり、つきまとわれたりした」が高く、ほとんどの項目で女性が男性を上回っている。

6 男女共同参画を推進するための取組について

● 男女共同参画に関する言葉の認知度

男女共同参画に関する14項目のうち認知度が高いのは、【DV】と【セクシュアル・ハラスメント】で「内容を知っている」が7割台半ばとなっている。以下、【男女雇用機会均等法】、【育児休業・介護休業法】で4割台半ばとなっている。一方、【埼玉県男女共同参画推進プラン・埼玉県男女共同参画基本計画】、【埼玉県DV防止基本計画】、【埼玉県男女共同参画推進条例】は「知らない」が6割を超えている。

● 「埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）」の利用経験と期待する役割

「埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）」を「利用したことがある」、「利用はしていないが、知っている」を合わせた《認知している（合計）》は1割強となっており、「埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）」に期待する役割は、「女性相談窓口の機能の充実」、「いつでも誰でも立ち寄れる交流の場」が4割を超えている。性別でみると、「女性相談窓口の機能の充実」では女性が男性を上回っている。一方、「男性向けの講座・相談窓口の充実」では男性が女性を上回っている。

● 男女共同参画社会実現のために必要なこと

社会のあらゆる分野で、男女がバランスよく積極的に参加していくためにはどのようなことが必要だと思うかを聞いたところ、男女ともに「男性も女性もお互いをパートナーとして理解し、協力すること」が最も高く3割を超えている。